

石井さんを偲ぶ

山 根 宏

石井さんと私が同僚であった期間は30年になりますが、所属する学部が異なっていたため日常的に接する機会はそうありませんでした。それに私は下戸なので一緒に酒を飲むこともなく、取り立てて濃い交わりであったとはいえないでしょう。それでもひとつだけ他の同僚との間にはない細いつながりの糸のようなものがありました。あれは私が立命館に赴任して間もない頃のことでした。あるとき石井さんから出身地を尋ねられ、富山県の魚津です、と答えたところ、石井さんから弟が結婚した相手も魚津の人だと言われたのです。さらに詳しいことを聞くと、石井さんの義理の妹にあたるその人は、私が子供のころから知っているKさん(旧姓)の妹さんであることがわかりました。私はKさんと同じ保育園に通っており、家の場所も知っていました。小学校と中学校は学区が違っていましたが高校でまた一緒になり、Kさんはその後、当時の私の同級生と結婚したと聞きました。Kさんを媒介にして、出身地も大学も違う石井さんとそんな形でつながっていることに、人の縁の不思議さを感じさせられたものです。

石井さんにまつわる思い出として忘れることができないのは、旅先でセーターを着せてもらったことです。赴任して数年経った頃、金沢で日本独文学会の秋季全国学会が開かれました。夜になって食事をしに街に出たのですが、たまたま入った店で石井さんと一緒になりました。その日の私は上着の下は半袖シャツという軽装でした。食事が進むうちに夜も更けてくると、さすがにこれでは寒い。その姿を見た石井さんは、地元だというのに北陸の寒さを忘れたのか、と笑いながら、自分が着ていたセーターを脱いで私に着せてくれたのです。この一例が示すように、石井さんは細かいことにも気をつく人で、私も教えられることが何度もありました。

石井さんの数年あとに私が立命館に赴任した時、石井さんには既に公刊された翻訳書がありました。二人ともまだ30代前半の若さでしたが、年齢はひとつしか違わない石井さんがずっと年長のようには思えたものです。文学部の同僚からは、石井さんはもう学部の重要な役職をこなしている、と聞かされ、学生の間ではファン・クラブもできているという噂も耳にしました。その後も学部のみならず全学の役職を次々となしていく石井さんの姿は、そうした能力のないことを自覚していた私には眩しく映ったものです。石井さんに遅れること十余年して私も、順番でまわってきたいくつかの役職を引き受けるようになったのも、思えば石井さんの後ろ姿を見ながら自分でも知らないうちに影響を受け、そのまねごとをしていたのかも知れません。先輩として長年にわたって導いて下さった石井さんに改めて感謝し、ご冥福をお祈りいたします。合掌。

(本学政策科学部教授)